

佳作

## 私のお兄ちゃん

神奈川県 川崎市立稗原小学校四年 原千鶴

五月三十一日。とつぜんの出来事だった。

この朝、いつものようにご飯を食べた後の散歩でレオの様子が変だった。よたよた歩き、ふらついたり、立ち止まったりする。すぐに帰ろうとレオが言った。家で様子を見ることにした。この日は私の家庭ほう問の日だった。一日中元気が無かった。この日からレオは、日に日に弱っていった。食よくが無くなり、後ろ足に力が入らなくなって、前足にも力が入らなくなって、とうとうねたきりになってしまった。

「レオ」と言うのは、十三才の愛犬だ。腰のあたりにビックリマークがついている。私より、三つ年上のお兄ちゃんだ。私が小さいころ初めて言った言葉は、ママでもパパでも無くレオだった。それだけ身近な大切なレオだった。

けんさ入院の結果、ひ臓にがんができ、それがはれつしてしまったことが分かった。CTけんさと手じゅつをすすめられたが、ことわった。老犬で体力がもたないかもしれないからだ。

それから三日後に体の右側がまひをおこしてしまった。病院の先生は、

「のうにもがんが転いしており、もう手じゅつもできないうし、治りよう方法もない。」と言った。

「好きな物を好きなだけ食べさせてあげてください。」とも言った。私には、この意味がまだ分からなかった。お母さんとお父さんは、

「お別れのかくごをしなさい。」

と言った。私はそう言われるのがいやだった。レオはぜっ対に元気になると思っていたからだ。それから、がんばってお世話をした。シリンジでお水をあげたり、ご飯をあげたりした。おむつ交かんも手伝った。こんなふうなお世話を何週間も続けた。

六月二十七日。私が学校から帰る少し前のこと。お母さんは、いつもの様にレオのおむつ交かん。後かたづけしていたところ、レオが後ろ足をバタバタさせて動き出した。様子を見守っていると、よろよ

ろと立ち上がり、一、二歩歩いてたおれてしまった  
そうだ。お母さんがびっくりしていると、また立ち  
上がり歩こうとしたそうだ。私が帰って来て、リビ  
ングのドアを開けると、レオが歩いてきた。私はラ  
ンドセルを背負ったままぼう然と固まってしまった。  
前足でふんばってよたよたと歩いているすがたにび  
っくりした。

この日から少しずつ体力が回復してきた。今は部  
屋の中を自由に歩き回っている。食よくも戻り、ほ  
えることもできるようになった。こんなレオを私は  
すごいと思う。いたかっただろうし、つらかったと  
思う。強くて立ばだと思う。たとえ階段を上り下り  
できなくても、ジャンプできなくても、私にとって  
は大事なレオ。だから、ずっとずっとレオといっし  
よにいたい。